
竜笛（りゅうてき）

猫目石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜笛りゅうふエ

【コード】

N9005T

【作者名】

猫目石

【あらすじ】

平安の世に現われた幼い殺生丸と源博雅との絡みです。竜笛を通して心を通わせた二人の名人の話です。

「龍笛^{じゆひし}」とは、雅楽に使われる管楽器の一つ、吹き物である。竹の管で作られ表側に「歌口^{うたぐち}」と七つの「指孔^{ゆびあな}」を持つ横笛。能管^{のつかん}、篠笛^{しのぶえ}など和楽器の横笛全般の原型あるいは先祖であると考えられている。

篠笛が竹の割れ止めに藤を巻いて漆を塗る以外は殆ど装飾される事もなく簡素な竹そのものといった姿に対し、貴族や武家など上流階級が用いた「龍笛^{じゆひし}」「能管^{のつかん}」は巻きや塗りなど手間のかかる装飾が施されている。

「大水龍」「青竹」など龍笛の名器の名前が今に伝わっている。中国大陸から雅楽の横笛として伝来した楽器である。

更に歴史を遡^{さかのぼ}ると世界中の横笛の元祖は古代インドであると言われるている。

西国に戻って暫く経った或る日、りんが手に持った物を差し出して私に尋ねてきた。

「殺生丸さま、これ、なあに？」

童女が持っているのは、横笛、それも唯の横笛ではない。

丁寧に巻きと塗りが施され名工が作ったと一目で判る品の良さと華麗な雰囲気併せ持つ龍笛。

低い音から高い音の間を縦横無尽に駆け抜ける、その音色は「舞い立ち昇る龍の鳴き声」と例えられ、それが名前の由来となっている。

雅楽の中でも極めて広い音域を持っている横笛。

「・・・これは、龍笛りゆうてきという笛だ。以前、私が良く奏そうしていた物」
そう、これは、あの男と交換した物であった。
殺生丸は膨大な追憶の中から、かの龍笛の持ち主との出会いを拾い
上げ感慨深げに回想し始めた。
あれは貴族どもが世を支配していた頃の事。
雅な貴族文化が華やかに咲き誇っていた時代。
・・・今は遙かな昔の出来事。

古いにしえの中国の大国、唐からの都、長安を模して造営された平安京。
平たいけく安あやけく在いる様にと名付けられた都の名前。
実際は魑魅魍魎ちみせうりょうが跋扈はつこする地であったがな。

可笑おかしな物よ、そうあれかしと願ねがって付けた名前と概して全く反対
の様相を呈する事が多いのだからな。

大陸から導入した最新の知識、四神相応の考え方に基もとづいて、東を
青龍せいりゅう、流水の川、西を白虎びやくこ、大道、南を朱雀すざく、湖沼、北を玄武げんぶと見
なし、丘陵みやこが存在する京。

以上、四つの条件を満たした地こそが天の四方を司る四神に最も相
応しいとする地相の考え方。

要は、そのような地こそが地上の権力者、天子のおわすべき場所
であると考えられた訳だ。

その点、平安京は東に鴨川、西に山陰道、南おぐらに小椋池、北おんに船岡山
を備えている。

まだ、私が童わらわであった頃、西国を抜け出し阿吽あうんに乗って何度か人界
に出かけた折の事。

雲海を飛び抜け一気に地上に降下する。

阿吽も思うがまま自在に空を翔る事に満足そうだ。

好奇心旺盛であった童の私は京の都に入り込み暫しの人界散歩を楽

しんでいた。

当時としては斬新な東西に走る碁盤目状の道路、大陸の都をそつくりそのまま真似ただけあって小路でさえ4丈（12m）、大路では8丈（24m）、一番の大道、朱雀大路に至っては、28丈（84m）もの幅があつた。

あきれる程の大陸傾倒ぶりであつた。

もつとも遣唐使が廃止され、もう、かれこれ百年近く経とうという頃、この国独自の文化も発達し始め人真似ばかりではなくなつていく。

かの大国、唐の国も滅んだ。

今は宋という王朝が栄えているらしい。

百鬼夜行の京の夜。

貴族どもは競つて夜な夜な宴を催し贅を尽くした山海の珍味を楽しんでいるが、一度目を凝らせば、この王城の地に潜む魑魅魍魎の類が見えてくるであろう。

あの時代は密教が盛んで王城安護の為に、丑寅の方角、即ち、鬼門に比叡山延暦寺が建立されていた。

くくつ・・・寺に忍び込み物は試しと供物を頂戴した事もあつたな。

歡喜団とか言つて唐から伝来した唐菓子。

小麦粉と米粉を混ぜ“清め”の意味で七種の香（丁子・白檀・桂皮など）を入れた皮で実を包み胡麻油で揚げた神饌。

何でも歡喜天なる神に捧げる供物だそう。

妙な形の菓子で八つの結びは八葉の蓮華を表しているらしかった。

口にしてみれば・・・人間にしてみれば、良い香りなのであろうが犬妖である我にとつては、きつ過ぎて食べれた物ではない！

ペツ、ペツ！

寺には香も常に立ちこめている。

このような臭いのきつい場所に長居は無用だ。

都の正門である羅生門を通り抜け朱雀大路を直進すれば、大内裏の南中央に宮城を象徴する朱雀門がある。

曾ては南門とも大伴門とも呼ばれていたらしいが、818年（引仁9年）「殿門改号」（建物や門の名称変更）により、その呼称は使われなくなっていた。

朱雀門は、宮城にある他のどの門よりも、広く大きく「重閣御門」とも呼ばれる特別な門である。

堂々たる威容を誇っている。

正面が七間（一間＝約1.82m）、奥行が五間の二重閣、流石に国家の威信をかけて作られただけあって勇壮華麗な内裏の正門である。

赤い丹塗りの柱が白壁に映えて美しい。

金色に輝く鴟尾、風に揺れる風鐸、昼間ならば、都の住民を始め百官の官人や外国使節達の往来で殷賑を極めている事であろう。

しかし、今は何もかもが闇に包まれ人為らざる者が跳梁する刻限、満月であれば月明かりを頼る事も出来ようが、今宵は二十六夜。

我の額にある月の紋様の如き細い三日月、暁闇の闇は、一層深く朱雀大路は墨染めのような闇の中に静まり返っていた。

朱雀門の二重閣の屋根に跳び乗り腰を落ち着ける。

心地良い風に誘われ懐に入れてきた愛用の龍笛を取り出し興惹かれるままに吹き鳴らす。

その笛の音は風に乗り一人の男を呼び寄せた。

男の名は、源博雅。

醍醐天皇の第一皇子、克明親王の長男、今上帝村上天皇の年上の甥

である。

母は菅原道真を大宰府に左遷し、その怨霊に呪い殺されたと噂される藤原時平の娘。

この平安京の都において最も血筋正しき公達きんだちの中の公達の一人、殿上人である。

この男には数々の逸話が今も伝わっている。

楽に秀で楽聖とまで呼ばれた男でもある。

嫋々（じょうじょう）と響く妙なる龍笛の音に誘われ、博雅は自身の止めるのも聞かず、闇夜にも拘わらず、この朱雀門まで、やって来たのであった。

一体、何者が奏しているのか？

これ程の龍笛の音色は、未だ曾て、聞いた事すらない！

誰だ！ 誰なのだ！

博雅は微かに差し込んでくる月明かりを頼りに目を凝らして朱雀門を眺めた。

楽の音は確かに朱雀門の屋根の辺りから響いてくる。

だが、あの二重閣に登る事など出来る者がいるであろうか？

魑魅魍魎ちみもつりょうはたまた悪鬼あくまの類であろうか？

いや！ 例え、あれが魑魅魍魎ちみもつりょうましても、鬼であろうとも構わぬ！

これ程の楽を奏でる事が出来る者ならば！

是非とも楽について語り明かしたいものだ。

余りにも見事な龍笛の音に応えるかのように博雅も愛用の龍笛を取り出し互いに奏し合う。

博雅自身、並ぶ者なき管弦の名手。

相譲らぬ名手同士の合奏が夜のしじまに溶けていく。

殺生丸も又、相手の並々ならぬ力量に感じ入っていた。

人間が・・・これ程まで我に肉迫した楽の音を奏してくるとは。
あ奴は何者ぞ？

演奏を止め、楼上から己に合奏していた者を見定める。

妖あやかしである殺生丸の目には、この程度の闇は何の障害にもならなかつた。

人品骨柄、卑しからぬ風情、身に付けている狩衣かりぎぬも高価な絹で仕立てられている。

何より、この深い闇に包まれた刻限に己の笛の音に惹かれて、わざわざ、この朱雀門にまで足を運んできた男の奇特さに呆れていた。

普通の者ならば、魑魅魍魎ちみせうりょうや鬼に出くわす事を怖れて、外出するなど考えもせぬであろう。

人間にしては、変わった男だな。

いいだろう・・・姿を見せてやろう。

それで、どのような態度を取るか、見極めてやろうぞ。

我を見て怖れ逃げ惑うなら、それもよし、人外の者と見て成敗せんとするなら、この爪に掛けるまでの事よ。

童ながら既に並の妖さえも凌駕する力を秘めた、その鋭く長い爪に力を込める。

二重閣の屋根からフワリと跳び下りる。

元結で止めた白銀の髪、金色の獣眼、尖った耳、額にある今宵の月を思わせる紋様、頬に走る二対の朱の妖線、絹拵わらわすいかんえの童水干の腰には黄金作りの太刀が。

目を欺あそむくほど美しい童姿ではあるが人外の者である事は一目瞭然。

だが、この男は何処までも変わり者であったようだ。

恐れ慄おそくどころか顔色一つ変えぬ。

それどころか、嬉しそうに、我われに話しかけてくるではないか！？

「只今の楽の音は、そなたが奏でしものか？」

「・・・・・・・・」

「私の名は、源博雅みなもとのかみまね、そなたの名は？」

「・・・・・・・・」

「応えたくないのなら、それでも良い。あの見事な音色を、もう一度、聞かせてはくれぬか？」

「未だ曾て、これ程の龍笛の音色を聞いた事がない」

「頼む！今一度、奏してはくれまいか？」

「どうやら、この男にとっては我が人外われであろうが無かるうが、何の関係も無いらしい。

唯々・・・樂の音に感嘆する想いのみ。

殺生丸は久方振りに興に駆られ、この源博雅なる男の願いに応え龍笛を奏し始めた。

博雅も又、殺生丸に合わせ吹き始める。

闇の中、繰り広げられる音の饗宴。

龍の尊称を持つ横笛が、その名の示す通りに高く低く自在に音階を駆け巡る。

その華麗なる旋律。

古今にも稀な名手の合奏、聞く者があれば涙せずにはいられぬ。

殺生丸も、又、悦に入っていた。

妖であれ人であれ、これ程の樂の音を奏する事の出来る者はまず居ない。

一時の夢を思わせる合奏が終わった時、ふと思いつき、殺生丸は己の龍笛を博雅に差し出していた。

驚きつつも即座に我が意を了承し自らの龍笛を差し出す博雅。

名手が互いの力量を認め愛器を交換したのだ。

間もなく夜明けの刻限となる。

不味い！早く戻らねば！

殺生丸は、その場を軽く蹴り、フワリと朱雀門の屋根に降り立ち、

そのまま空に消える。

阿吽を待たせている場所まで急がねば！

朝までには西国に戻らねばならぬ！

殺生丸に置き去りにされた博雅は狐に抓まれたような気がしていた。
あれは夢ではないのか？

しかし、己の手には紛う事なく証拠の龍笛が！

それは見事な品であった。

吹き口の辺りに赤と青の葉のような物が描かれていた。

屋敷に戻り、改めて、その龍笛を奏してみれば何と素晴らしい音色

である事か！

澄み切った音色が龍が舞うように空に昇っていく。

我知らず頬に流れる涙を気にもせず、博雅は、その龍笛を吹き続けた。

類稀な僥倖に感謝しつつ。

“葉二”^{はふたつ}と名付けられた、その龍笛は、後世、天下第一の名笛として名を残す。

その後、殺生丸が、もう一度、京の都を訪れた時、既に博雅は鬼籍の人となっていた。

無理もない・・・妖である己にとっては、つかの間の時であっても、人にとって二十年は長い。

源博雅、極めた位から博雅三位、長秋卿とも呼ばれた。
藤原実資なる男が、日記「小右記」にて「博雅の如きは、文筆・管弦者なり。ただし、天下懈怠の白者なり」と評している。
権勢を極めた藤原道長にしても、ある人を評する際に「あの人は、才能はある人なのだが、あの怠慢の様子は、博雅のようだ。」と述べているようにかなりの怠け者だったらしい。
・・・だが、それで良かったのかも知れない。

時代は、藤原氏全盛に向かっていた。

皇族として下手に政治的野心など持てば簡単に闇に葬り去られていただろう。

権謀術数に長けた藤原氏の事だ。

例え清廉潔白であろうとも事実を捏造して謀反の罪を着せるくらいの事はやりかねない。

曾て威勢を誇った奈良時代からの豪族、大伴氏が失墜したように。

如何に母親が藤原氏の出身であろうともだ。

兄弟間でさえ熾烈な権力闘争を繰り広げた藤原氏である。

寧ろ、うつけ者の評判を取っておいたおかげで野心家どもに利用されずに済んだとも言えるだろう。

正しく“大賢は愚なるが如し”だな、博雅よ。

「殺生丸さま、どうしたの？」

りんの声が回想から己を引き戻した。

黙ったまま龍笛を眺めていた私を不審に思っただらしい。

もう一度、手に取って博雅愛用の龍笛を眺める。

「この笛、何て名前がついてるの？ 殺生丸さま」

りんに聞かれて幡と気付いた。

そう言えば……この龍笛には名前が無かった。
勿論、博雅は、名前を付けていただろうが己は、いつも単に“博雅の笛”とのみ呼び習わしてきた。
これ程の名笛に名を付けずにいたとは。

「そうだな……三位さんみ」

そう、三位さんみが良かろう。

あの男を偲しのぶために。

その時、ゆるゆると回想から現実に戻りつつあった私の意識を逆撫でするように騒がしい物音が！
邪見のだみ声が闖入してきた。

「こりゃっ！ りん！ また、琴の稽古をさぼったなっ！」

「だって、毎日、琴のお稽古や、縫い物に、文の習い事ばかりで、ちっとも遊べないんだもん！」

「馬鹿者！ これまで散々、遊び回ってきたではないか！ お前も、そろそろ娘らしい習い事を覚えねばならんのじゃっ！ 殺生丸様に恥を掻かせぬようになっ！」

「りんが、習い事をさぼると、どうして、殺生丸さまが恥を掻くの？」

「ウツ！ それはだな……お前が……殺生丸様のお側に居るからじゃ」

「だって、前は、お側に居ても全然、恥になんかならなかつたよ。」

「ええい！ ああ言えばこう言う！ つべこべ抜かさず、ちゃんと習い事に励むのじゃっ！」

西国に戻って以来、邪見はりんの教育係兼監督役となっていた。

野育ちで林野を駆け回って遊んでいた、りんにとって、いきなりの教育は、かなり窮屈な物であろうな。

無理もない。

御殿暮らして日に焼ける事も無くなったりりんの肌は抜けるように白くなった。

肌理は元々細かい。

少し癖のある柔らかい黒髪は、毎日、りん付きの侍女達によって、それはそれは丁寧に梳られ艶を増した。

腰に達する程、伸びもした。

今は両脇で一房づつ結わえ残りは流している。

大きく澄んだ瞳は長い睫に縁取られ、光を受けると夜空の星を思わせる程に瞬く。

ちよこんとした鼻、いつも、微笑みを絶やさぬ愛らしい唇は薄紅色の花の蕾のようにさえ見える。

未だ幼さが色濃く残るりんではあるが“梅檀は双葉より芳し”の例えにもあるように、その麗質の兆しが既に見て取れる。

成長すれば、さぞかし艶やかな名花となる事であろう。

そう、いずれ私の右に並び立つ者としてそれに相応しい素養を。

邪見がそうした私の意を汲んでりんの教育を買って出た事は間違いないが。

りんは、まだまだ遊びたい盛り年頃。

些か（いささか）やり過ぎの傾向があるようだな。

まだ、ガミガミとりに説教を垂れている邪見に嫌気が差し、つい手に持っていた三位でポカリと殴ってしまった。

しまった！

邪見はどうでも良いが三位は、無事か！？

幸い三位に破損は無かった。

その後、気絶した邪見を置いて私とりんが阿吽に乗って久々に空中散歩と洒落込んだことは、わざわざ言うまでもないことだろう。

了

2006・8/2（水）作成

(後書き)

《第十四作目「龍笛」じゅうていせについてのコメント》

みなもとこのひろまほ
源博雅が朱雀門で会ったのが殺生丸であったとしたら？

そう考えてみたら頭の中に浮かんできた作品です。

実際、もし、そうだとしたら殺生丸は人間年齢に換算すると(40
×19¹¹760歳)くらいになってしまふんですが。

其処はそれ、妖怪の一年が人間の何年に当たるのかハッキリした事は判らないという事で不問にしてください。

妖怪も色々と種族が多そうだし人間よりは長生きだけど妖怪としては短命の種族もいるかもしれないし。

または種族によって寿命に違いがあるのかも知れない。

とにかく、今は隻腕の殺生丸ですが、あの長い、しなやかな美しい指には高雅な龍笛がピッタリだと思いました。

凄く似合いますよね！

2006・8/10(木)

猫目石

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9005t/>

竜笛（りゅうてき）

2011年7月9日04時46分発行